

いわかづみ

令和六年六月 第九七号

- ◇ 村の景観と歴史・人物(16)
- ◇ 民具が語る生活史(民具②)
- ◇ 方言一考(やっちもねえ)
- ◇ モノ言うもの(土鈴)
- ◇ 歴史館行事の報告・お知らせ

村の景観と歴史・人物(16)

峠を越えた人たち⑦

良寛

渡辺 伸栄

良寛といえ、かくれんぼ

ある日のことです。良寛さまが村を歩いていると子どもたちがかくれんぼをしていました。どれどれ、ワシもかたせておくれと言って、良寛さまも隠れました。隠れながらウトウト居眠り。目が覚めると、日が暮れて、子どもたちはとっくに家に帰ってしまっていました。

良寛といえ、真つ先に思い出されるのは、この逸話。多分、子どもの頃に読んだ昔話の一場面が頭にこびりついているのでしょう。

良寛の逸話は、地元の三島郡や西蒲原郡に多く伝わってきたようです。それらが児童書として刊行されて、子どもたちに親しまれるのだと思います。

若い頃下宿していた白根のお寺に、「天上大風」と書かれた良寛の色紙が掛けてあって、誰しも普通に書けばこんな文字になるだろう、などと思つて眺めたものです。

私にとつての良寛は、その程度の存在でした。しかし、良寛人気は全国レベル。ひょうひょうと気ままに生きた良寛は、現代人には適わぬ願望となつて憧れの対象になつたのでしょうか。良寛の書と共に、その生き方に惹かれる人は多いようです。

近年の良寛研究によつて、禅僧良寛の深い精神世界も解き明かされ、良寛ファンの質は、かなり高度になつていようようです。

良寛、十三峠越えの証明

その良寛が、我らの十三峠を越えて、米沢へ旅したというのです。我が村の宿場の道を歩いたとなれば、にわかには良寛さまへの親しみが増すというものです。

良寛が十三峠を通行したことを証明したの

は、隣の小国町出身の川内芳夫という方です。

良寛の漢詩に、「米沢道中」と「宿玉川驛」という題の作品があつて、前者は喜多方から米沢へ旅した際のもの、後者は鶴岡在の玉川というところに泊まった際のもの、というのがそれまでの定説だったそうです。

その定説を川内さんがくつがえしたのです。二つの詩のうち、「宿玉川驛」の玉川は、十三峠の玉川のことだと。その論証を簡単に言えば、良寛の詩に書かれた玉川の情景が、小国町の玉川にはピッタリ当てはまり、鶴岡在の玉川とは似ても似つかない、ということを実地に証明したわけでは、

これで、詩の「玉川」は十三峠の玉川であることに確定。よつて、もう一つの詩「米沢道中」も十三峠の旅中に詠んだものであると決定されたわけでは、

川内芳夫さんは、山形県内の高等学校長を退職後、良寛についての研究をまとめられ、「良寛」という書名の大冊を著しました。

その本の中で、玉川集落の玉泉寺こそ良寛宿の寺であるとしています。

詩の描写が小国町の玉川であり、行脚の僧が玉川で泊まるとなれば、必然、玉泉寺ということになるわけでは、

ちなみに、宇津峠の峠頂近くの道端に、「良寛が『米沢道中』の漢詩を読んだ場所」だと示す

看板が立っています。

これは、詩の内容から見て、ここら辺から見える風景を読んだのではないかという程度の想像です。地元の有志かだれかの親切でしょう。

「くだろう」が「くぢにちがいない」になり、やがて「くだ」になるのが、郷土史の常です。世界史にも日本史にも影響しない些細なことで、目くじらを立てるほどのことでもないということなのでしょう。

玉川に泊なら、その前日はどっか？

かくて、良寛は、我が村の宿場道を歩き、大里峠を越え、玉川宿に泊まって米沢へ行ったことになりました。

燕市の良寛史料館の年譜で、文政四(一八二一)年秋から翌文政五(一八二二)年秋、良寛六四歳から六五歳にかけて米沢往復の旅をしたと なっています。

さて、では、玉川の前日はどこに泊したので しょうか。一切、明らかにされていません。なにも残っていないからです。

ところが、土沢の来宝院という寺に伝わった良寛の書だという大部の作品が、歴史館に展示されたことがあります。

もしや、玉川の前日は土沢泊かと、私など当時期待したものです。

この書に、土沢に宿すとか、それらしいこと

が書いてあれば決定打なのですが、そういう詩ではなかったようです。そもそも、良寛の真筆だという証明もないとのこと。残念無念。

「だろう」から「だ」に運ぶどころか、「であればいいのだが」程度、せいぜいタラレバ話で終わりそうです。もちろん、本紙前号の義経同様、否定の材料もないわけで、可能性としては大いにあり、とも言えることは言えるでしょう。

美空ひばりの越後獅子

川内先生の大著の後半は、もつぱら、良寛米沢訪問の目的解明の論述です。

良寛ファンの大方は、雲水に目的などあろうはずがなく漂泊こそ良寛の真髓とばかり、川内説のこの部分は無視しているように見えます。が、せっかくなので、簡単に紹介します。

良寛の暮らした三島・西蒲地方は、今でこそ一大穀倉地帯になっていますが、当時は、大河信濃川の度重なる出水で、低湿地のこの地域は、大変悲惨な状況でした。

にもかかわらず、代官は有力商人を優遇して利を得ることしか考えず、農民救済の政策も無し。良寛の実家も豪商でしたが、代官と結託した新興商人によって没落の有様。

時あたかも米沢では、鷹山公の善政期。公により民が救済された話を伝え聞いた良寛は、その目で鷹山公の善政を確かめたかったのだ。

と、これがざつくりの川内説です。

西蒲月潟村の角兵衛獅子。あれは、毎年凶作飢饉で疲弊した農民が、やむを得ず、子どもを旅稼ぎの芸能者にしたものといわれています。

美空ひばりの越後獅子の唄は、角兵衛獅子の唄。あの哀愁を帯びた歌唱は、水に苦しめられた蒲原農民の悲歎でもあったわけです。

川内説が成り立てば、ひばりの哀歌は、十三峠を歩く良寛の悲歌でもあった、ということになるのでしょうか。



大里峠



玉川の玉泉寺

民具が語る生活史 ② 杓(エブリ)と雪形

5月にふと思いついて立って東京で働いている方へ、杓差岳の写真を送りました。「エブリ爺(じ)やがややメタボです!」と付け加えました。

杓差岳の「エブリ爺や」、光兔山の「うさぎ」は一般に「雪形」として知られています。全国で調査・把握されている雪形は、新潟県が一番多く、これには積雪の様子がよく見える山が人里近くにあること、米作りが盛んなことが関係していると思われます。雪形という名称は昭和に入ってからのもですが、各地で山に残る雪

の形を農作業の目安にしてみました。農業をする人になじみの人や馬、牛、鳥が、種まき・豆まき・代掻き・田打ちをしている姿に見立てられることが多いようです。「今年は雪形がはやく現れた・消えたから〇〇」など、天候や作柄の予測にも用いられます。山肌に雪形を見出すパターン(ネガ型)と残雪に雪形を見出すパターン(ポジ型)の2通りがあり、エブリ爺やは前者、うさぎは後者にあたります。

雪形から山の名前がついたものでよく知られているのは、長野県と富山県にまたがる白馬岳(しろうまだけ・はくばだけ)ではないでしょうか。馬型の雪模様「代馬(しろうま)」とされ、代掻き(しろかき)をする馬の形に見立てられます。代馬が見られると代掻き作業をすべき時期だと知ったという、まさに農事暦の代表的な雪形です。「代馬」に「白馬」という字があらわれ、現在の名前「白馬岳」になったようです。といっても、「代掻きって何?」と思われる方もおられるかもしれません。エブリ爺やの「杓(エブリ)」も、「エブリって何ですか?」と聞かれることが多くなりました。

エブリ爺やも代馬も、代掻き(しろかき)という作業をしています。代掻きとは、田植えの前に水田に水を張り、土を細かく砕き、丁寧に掻き混ぜて田んぼの表面を平らにする作業をいいます。水田の水漏れを防ぎ、田植を容易にし、

苗の根付きと発育を良くします。現在はトラクターで行われますが、かつて牛に犁(すき)を引かせて田起こししていたころは、代掻きも馬鋤(まぐわ・まんが)を使って牛や馬で行っていました。代掻きは荒代(あらじろ)、中代(なかじろ)、植代(うえじろ)の3回行うのが一般的で、仕上げの植代は杓・柄振(エブリ)を使って人力で行いました。

エブリは、『日本民具辞典』によると、「…柄の先を股に作り、縦100cm、横120cmほどの板を丁字状に取り付けた形態が一般的で、枝の先を波型にしたものもある。…(P.66)とあります。私はよく「野球部のトンボのようなものです」と説明しています。

早春のころ、ぜひ杓差岳をご覧ください。瘦身のおじいさんが腰を曲げ、エブリを使っている姿が見られます。私はおじいさんが少しずつふくよかになっていく様が好きです。そのころには田んぼ一面に苗が植わり、風にそよいでいます。関川村では桂集落や高田集落から見られる杓差岳の姿がよいと専らの評判ですが、私は大島駅踏切を越えてから見られる杓差岳も好きです。小学生のころ、知らず知らずと眺めながら通学していた思い出も相まって、より一層思い入れがあるのかもしれない。(神田舞子)

参考文献 『民具学会編一九九七「えぶり(枝振)」 『日本民具辞典』ぎょうせい出版

方言一考・やっちもねえ

「やっちもねえこと、してんなよ」とは「つまらないことするな」の意味で、大人が子供に言う科白である。「らっちもねえ」とも「やっちもねえ」とも言うが「埒(らち)も無い」の訛ったものだろう。埒とは元々仕切りの垣を指し、「埒も無い」は「とりとめない、たわいもない」の意味を表し、「區別が無く滅茶苦」と意味が広がる。しかしこの「埒も無い」という言葉自体、今ではほとんど聞かなくなった、謂わば死語で、それが方言に確固として残っている貴重な例でもある。

芍薬の花期が過ぎても毎日高台の公園に通い、傍から見れば「やっちもねえ」事に精を出すK氏、「やっちもねえ」事をしていてという自覚があるから、人からの評価を求めない。褒められれば喜び、貶されればごもつともと頭を下げる。週末の道の駅巡回(ゴミ拾いと車のナンバー調査)も同様で、風体が悪いから敬遠されるか文句を付けられるかのどっちかで、怒られれば平身低頭の一手で切り抜けている。自分の仕事に矜持はあっても驕りが無い。買いつけて言え「日照りの時は涙を流し、寒さの夏はおろおろ歩き」を髣髴させるが、どうしても賢治とK氏が重ならないのは、外見で判断する私も煩惱の人だからである。(安久)

モノ言うもの・土鈴(どれい)

前回も少し触れましたが、この三月で村の調査員を辞め故郷の群馬に帰った斎藤氏の置き土産の一つに土鈴があります。村内では今まで見つかっていなかった貴重な遺物ですが、旧女川小学校の展示ケースに入っていたもので、出土の詳細は不明です。女川のいずれかの遺跡から発見された物でしょう。縄文時代中期～後期(4000～5000年前くらい)の鈴と考えられ、文様は棒状の何かで同心円状に刺突しています。内部は空洞で、中に丸(がん)と言われる粘土玉もしくは小石のような物が三個以上入っており(X線写真で判明)、耳の傍で振ると「シャカシャカ」と音が鳴ります。村内で発見されている土版と同じく、生活用具というよりも祭事や呪術な事に使われたと考えています。私はこの鈴を時々振りながら、当時のこの村の生活を思い、また彼が第二の相澤忠洋になるような大発見をすることを祈ります。(安久)



直径四・五㎝の球
体で、無数の穴が
開けられています。
(刺突紋)

歴史館行事の報告

○春の峠歩き①北黒川～中継峠 4月13日(土)、参加者12名
○春の健康登山「倉手山」5月18日(土)、参加者11名

○平田大六家住宅見学会 5月16日(木)、参加者11名

○古文書解読講座(5・6月) 江戸時代の村の暮らしを古文書から学んでいきます！月2回行っています。ご興味ある方ご連絡ください。

お知らせ

○村民ギャラリー「小さな文化祭」会期を一週間延長させていただきます！7月21日(日)まで開催しています。月曜休館・月曜祝日の場合は翌火曜休館、観覧無料。

いわかがみ 第九七号

発行日 令和六年六月

編集発行 せきかわ歴史とみちの館

tel0254-64-1288 Fax0254-64-0300

